

ドイツ海外研修「心身の健康教育」

I 研究の内容

本年度、「心身の健康教育」をテーマとし、ドイツへ11月3日から11月14日まで、教育課題研修指導者海外派遣プログラムに参加致しました。

1 研修調査団の研究課題

(1) 体育

「生涯にわたって運動を継続できるようにするための指導方法」
「指導内容の整理、体系化」「体力の向上に関する取組」「資格制度」

(2) 健康

「心身の健康に関する指導体制」 「学校の環境づくり」

(3) 地域との連携

「施設の有効活用について」 「地域のスポーツクラブとの関わり」

2 研修調査団の調査方法

学校や教育機関、計9ヶ所を訪問し、教授や学校長の講義、授業の実際の見学、聞き取り調査を行い課題追求をする。

II 考察とまとめ

今回の研究では、以下の点が明らかになった。

1 ドイツのカリキュラム等の実施について

ドイツ国内でも「運動する子、しない子の二極化」、「肥満の子どもの増加」などが子どもたちの健康の課題として取り上げられている。カリキュラム等は、国で統一されておらず教育に関する権限は主として州に属し、各州や各学校で時間数や内容を工夫し、いろいろな研究や取組が行われていた。そのため、州による独自性がみられた。

2 「動きのある学校」について

学校内で健康教育を推進する際の中核的要素として、運動を位置づけ実践していたのが「動きのある学校」であった。「動きのある学校」の理念は、ビーレフェルト大学の Kurz 教授やヴッパータール大学の Balz 教授の講義により理解することができた。ラボアシューレ、ビーレフェルトやゲシュヴィスター・ショル、レアルシューレでその理念は実践されており、体育学習の時間をはじめ、休み時間の運動、学習中の運動など、いろいろな教育場面で運動を取り入れ、教育効果をあげている。子どもが運動に進んで取り組むための授業開発や環境の整備・遊具の設置、異年齢集団でかかわる場面を設定し人間関係を育てる取組、子どもの実態に応じた総合的な体力の向上プログラムが研究・実践されており、大変参考となった。

3 子どもたちの能力を高めるための取組について

子どもたちの運動能力を高めるために、多様な動きづくりや子どもたちの実態に応じた学習がプログラムされ実施されていた。クロンヴェストハイム、シラーグルントシューレでは特別活動の学習で体を使って表現する活動が取り入れられていた。これは、動きのある学校の理念が取り入れられているのではないかと感じた。体育の学習では、体育施設の用具を使い跳ぶ、ぶら下がる、上る、下りるなどの動きができる場を設定し、いろいろな運動感覚を身に付ける学習が展開されていた。ゲシュヴィスター・ショル、レアルシューレでは、運動テストを実施し、母校の実態を把握したうえで、子どもに必要な運動を行うようにしていた。期待されている成果を上げるために、何ができるのかを考え、どのような方法で教えていくのかは、学校の裁量にゆだねられ、教師の力量がとても必要になると考える。

4 バルシューレについて

バルシューレは、ボールゲーム全般に共通する基礎的な能力の育成に力を注ぐ運動指導プログラムであり、このプログラムによりどの子どもも運動能力を高めていくことができると考える。一般的なバルシューレのプログラム以外に、肥満を改善するためのプログラムや才能のある子どもを見つけるプログラムなども実施されていた。運動神経系が育つ10歳くらいまでの年齢で、このプログラムが実施されると、知的感覚や注意力、想像力をはじめいろいろな運動能力を高めることができると考える。わが国でも、授業時間はもとより休み時間、部活動等で子どもたちがいろいろな運動を体験し、運動の楽しさを味わうことができるように積極的に働きかけていくことが大切である。

5 教師の指導観について

各学校での取組の様子を視察したとき、多くの教師は支援に徹したかわり方をしていた。場の設定や声かけ、レベルの差に対応するプログラムの実施など、子どもの考えや思考を引き出すようなかわり方をしている教師が多かった。学習の主体者である子どもが、気づき、判断し、分かる力を育てることができると感じた。また、基礎的な能力を育てる場面などでは、教えるということもされており、教えて力を付ける指導の場面も大切であると感じた。教える場面、考えさせる場面の使い分けを教師がしっかり考え、教育実践していくことがとても重要であると感じた。
(後屋敷小学校 宮澤 洋一)